



ぼくらは誰にとつての一番にもなれなかったね。なんかこの電車、歯医者みたいな匂いするね。なんでお医者さんがいる場所は病院っていうのに、歯医者さんがいる場所は歯医者っていうのかな。次は大森駅。今度朝ごはんを食べる練習しよう。松屋フーズおいしさ丸見えチャンネルと一緒に聞きに行こうね。安い納豆のパックって開けづらいよね。誕生日祝ってくれなかった友達誕生日祝えるタイプ？ ほくろのバスケじゃなくて黒子のバスケだよ。昨日トイプードル跨いで飼い主に怒鳴られたわ。あの懐かない犬ってまだ飼ってるの？ 夕方マック行ったのにまだ朝マック食べてるおじいちゃんおばあちゃんこわいよね。次は大井町駅。ぼくたちは傷付いたと認め合おう。逆恨みみたいにして、やっとここに辿り着いたんだ。ここで一句「襟足の長さで分かる 親の顔」。「襟足の長さで分かる 親の顔」。そういう偏見やめなよって。でもさ、全く再生されてない芸能人の YouTube ってほんと見てらんないよね。日高屋で飲んでるくせに説教する奴なんねん。誰からも理解されなくてもいいとか、嫌われるの怖くないとか卑怯だよ。今度ハイタッチして骨折した山中くんのお見舞いに行こうね。そうそう、高島ちゃんの彼氏。高島ちゃんはバレンタインの日に炊き出しみたいチョコ配ってたんだよ。そうそうそう、去年NPO法人設立した子。次は品川駅。立ちションしてる女の人見たことあるの？ 明け方の蒲田にいるおばさんだよ。離婚のこ×1って呼ぶのおかしいよね、○1までは言えないかもだけどせめて△1だよ。小銭ってお金なのにたまにゴミに見える時ない？ 何歳になっても紙コップの検尿は難しいね。次は品川駅。ザ・たっちってヒトクローンなの？ 叶姉妹も阿佐ヶ谷姉妹も本当の姉妹じゃないよ。本当なんてどこにもないよ。帰ったらフーリングであみだくじしようね。代わりに覚えといてあげるから、忘れたかったら忘れていいよ。でもそれしか知らないなら忘れ

らんないか。いや座高測んのに何の意味あんねん！ プリウスミサイルって言葉史上一番こわいよね。次は田町駅。口っていう一番のおもちゃがあったよ。よかった、ぼくらはきつと自分にしか迷惑かけてないよ。だから今日は夜寝る時のふかふかの枕になる。ね、百円ローソンってなんか暗いよね

林檎

金子紗来

甘い蜜が掠め取る小さな誘惑

遠い国の物語

艶めかしくひっそりと騒ぎ立てる

気品高い貴方が魅せる華麗なステップ

言葉遊びをしませんか

酔いしれる複雑な境界線

秘密の園の鍵

砂糖水で溺れた報いを受ける

暗闇に影を落とす摩天楼

底知れぬ深さに味わいが滲む

幻覚の鏡に映し出された渴望

煌びやかな伝統

眩しく儂い味を挽ぎ取る

口に含んだ深淵と交わす挨拶

静かな孤独との戦い

剥かれて裸になった焦燥

初めて自分という在りかを知る

無情な風に吹かれて揺らぐ

創られた未来に乾杯

起源を飲み込み息が詰まる

甘い蜜が掠め取る小さな誘惑

遠い国の物語

惹きつけられ堕ちる

不条理な方程式

定めを知らず空の軌跡を辿る

## レモンとチョコレートとの狭間

木村藍

賢いあなたは、あなたを劈くことばに置いて行かれて、

科白のない世界で生きていくことができない

口を衝いて零れていかない言葉に喉を塞がれて、

血と記憶を繋ぐ蜘蛛の糸を見逃して、

なんて新奇な言葉なのだ、

青白くなっていくその頬に、

断線しそうなケーブルを繋いで、

わたしの上気する頬から直接生命を分けてやる

あなたの顔が同化して見えなくなりそうな冷たい病室でレモンに爪を立て、

少しずつレモナールが嗅覚を刺激して意識が戻りそうになると、

レモンを食べたらチョコレートのことを想像できないの、と

あなたは泣きながら虚になった肺を撫でた

コート掛けで首を吊っている恭しさに

おやすみを言ってみると

ノートが馬に乗って駆け出す

レモン色の朝が来る

たちあがる肖像

草野海子

和紙が降る

ひとひら

ふたひら

悪戯な摂動を

残像に刻み

幾枚もの和紙が

時計の内の歯車のように

指揮者の描く軌道のように

拍を徴しながら

予感がある

和紙がなめらかに

重なっていく

枯葉のつぶやく

かすかな擦れとともに

和紙は快くて宙を舞い

和紙は快くて互いに擦れ

和紙は快くてとどまる

スモーク・グラスのように透ける和紙

血管のように透ける線

予感がある

和紙がひとひら  
重なっていくたびに  
ひとひら  
積もってゆくごとに  
頭になるのは

### 畏怖の肖像

別の像を見出そうとしても  
ひとひら  
白木が彫り進められるように  
逃げ場もなく確かになるのは  
熱情の偶像

驟雨に煙るように  
寄る辺なくたちあがってくるのは  
ひとひら  
わたしのころの形状  
わたしの輪廻  
の象徴

# 焔ひくの國救くひの水脈

原作：ウイグル民謡 オウステン ナフシスイ Osteng Naxshisi

成田凜

ئۆستەنگنىڭ تېگى قاتتىق ،      オウスタンムン      テエギカツトウク  
چايسا كۆتمەن ئۆتەيدۇ      チエプサ      カツトユメン      ウトウメイドウ  
ئالەم ئۆگۈچسى بەگلەر ،      ザーラム      トンチイン      ベグレエツ  
بېشىموزدىن كۆتەيدۇ      ビシムドユン      キャツトウメイドウ

オウステン ナフシスイこれが「Osteng Naxshisi (川のうた)」という民謡ですとサリナさんが教えて

てくれる。今回は二人でイリイ地方に伝わる民謡を翻訳することに決まった。この本はたまたまわたしが手元に持っていた本なのだ、こうして日本に持ってきておいてよかった、なんという偶然だ、とサリナさんが話す。イリイ地方、ウイグル語ではグルジャという。グルジャといえはいくつにも枝分かれする川と温和湿潤な気候なのだそうだ。その川は天山山脈からカザフスタン東部のバルハシ湖に注ぎ込む

一八〇〇年頃   グルジャ

命を助ける水がある。人も馬も牛も羊もヤギも、生きとし生ける物たちは水を必要とする。例えば雪解け水はその一つである。世界で最も海から遠い國、砂漠の國、山の國、ここウイグルでは春の雪解け水は生き物の生活を支える天物であった。だが春が幾千回と巡り、人は大陸を駆け回り、大河を越え、砂漠を越え、山脈を越え、山を降り、平野に家を建て、あまねく地にその数を増やして暮らし住むようになった後では、雪解け水だけではすべてを潤すことは叶わなくなつた。そしてまた、不断の雪を頂く天山山脈の地下にも命を助ける水が流れていた。これまで人は地下深くに流れる天の水脈へと



だんだだんだん　だんだだん、かわア　掘ってりゃ　りゃく  
だんだだんだん　だんだだん、やつら見てるよ　見られても  
だんだだんだん　だんだだん、いくら掘っても石だがねつつつて  
だんだだんだん　だんだだん、おとつあんの　石頭　石でなぐられて  
だんだだんだん　だんだだん、びしゃって　飛んでも　川　にはならんの  
よう

だんだだんだん　だんだだん、やつら見てるよ　じろりと睨んで  
だんだだんだん　だんだだん、にどかえれずのお家には、かなしい子どもと  
妻が待つ

だんだだんだん　だんだだん、いくら掘っても石だがね  
だんだだんだん　だんだだん、

果てがないのサ  
キリがないのサ

絶えないリズムに鍬のドラムス

灼熱の涸れ沢に躍る血肉と汗飛沫

歌刻む男とこの手足は陽光に滅びはじめる

どこにもないのサ

果てがないのサ

監視の目線は命の奥まで行き届き

やつらどこか遠い場所から来たくせに

瞬きもせずこちらを見ている

夏がどれだけ暑かったとしても、ウイグル帽子の下には白い布を付けるんですよ。きつとびしょびしょに汗が染みこんだでしょうね。その地域の何十人、何百人と同じ川を掘ったんです。お昼にはきつと奥さんが来て、エッケンチヤイとナンを持ってきて応援しに来てくれたのでしょうか。わたしの想像ですけれどもねとサリナさんが立ち上がって空の鍬をふるう。どすつと鈍い音が聞こえる気がする。どすつ　どすつ　どどすつ　どどすつ　サリナさんの目には見えている、わたしの目にも見えている。飛び散る汗、真上に上がる太陽、振り返ると腕組みをして睨みつけてくる監視員、一瞬だけそよぐ風、

乾いた土の匂い、重たい泥の匂い、行ったことのないウイグルの土を踏みしめる。脳裏の景色をサリナさんの言葉に委ねる。サリナさんの心もかつての農夫が遺した言葉に委ねられている。

だんだだんだん だんだだん、おっと思うと石ではないが  
だんだだんだん だんだだん、泥がぶしょつと沸いてきて  
だんだだんだん だんだだん、泥に嵌まって

だんだだんだん だんだだん、足はおしゃかだ  
だんだだんだん だんだだん、隣のじじいはそのまま沈んだ

だんだだんだん だんだだん、次はお前だ お前だよ  
だんだだんだん だんだだん、泥に嵌まって

だんだだんだん だんだだん、足はおしゃかだ

だんだだんだん だんだだん、隣のじじいはそのまま死んだ

だんだだんだん だんだだん、次はお前だ お前だよ

だんだだんだん だんだだん、日照りに灼かれて

だんだだんだん だんだだん、踏み込めなければ

だんだだんだん だんだだん、後ろを向いて

だんだだんだん だんだだん、見張りがいれば

だんだだんだん だんだだん、おっと思うと心臓は

だんだだんだん だんだだん、泥がみたいにぐによりと曲がって

だんだだんだん だんだだん、泥に嵌まって

だんだだんだん だんだだん、心はおしゃかだ

鍬で掘って、掘って、石を掘って、泥を掘って、河はいつかはできてはいくのですが、しかしその頃には鍬もまた曲がり、腰もまた曲がり、彼らの生活は代わらず貧しく、犠牲とも言い難いようなうらみとつらみが、一節一節に宿るような、河のうた、オウステン ナフシスイ、命を助ける水があるなら、命を助けた命があった。

オウステン ナフシスイ、河づくりのうた

オウステン ナフシスイ、男とこはみんな

オウステン ナフシスイ、故郷を離れた

オウステン ナフシスイ、オウステン ナフシスイ

「サリナさん、このひとたちはこの歌をうたって自分自身を鼓舞し、やり場のないうらみを込めて昇華したのでしょうか、こんな歌をうたったら、監視員たちにも聞かれてバレてさぞや怒られたのではないのでしょうか。」

オウステン ナフシスイ、だんだだだん だんだだん

体さえ動かすのなら、きっと言葉がなんであろうと、何語を話そうと、聞き取れなくても、

体さえ動かすのなら、おそらく罰せられはしなかった、何語だろうと、聞き取れないから。

オウスタンムン テエギカツトウク、チエプサ カツトユメン ウトウメイドウ

歌に残った言葉こそ、現代<sup>いま</sup>まで流れる血脈の涸れ沢が如く読み<sup>よ</sup>がえり

ザーラム トンチイン ベグレエツ、ビシムドゥン キャツトウメイドウ  
かえりたまえ、今日こそ國へ

オウステン ナフシスイ、その川は、教科書に載るような有名な歌ですが、わたしたちの血肉に流れる水は、命が助けた水ですが、いまは涸れ沢だとしても、掘り返せばその石やその水が何でできているのかがわかってしまうのを恐れて、その川は再び灼熱の地の底へ、焼かれて、埋められて、戻されて、消されて、しまったのです。しかし現代も、グルジャの大地は見渡せばあたり豊かに枝分かれした川に潤されているのであって、だから、いま、わたしたちは歌をうたって、その川からすくいなおすんです、そうですね。

んーアーんーアー

だんだだだん、だんだだん

だんだだだん、だんだだん

その川は天山山脈からカザフスタン東部のバルハシ湖に注ぎ込む。

んア わたしや グルジャダリヤの雪の水  
さりつあなの  
んア あなた 月の光のまばゆくて  
見やれば なあがい黒川の  
なかごろ浮かぶ銀の月  
もってかえりやこどもらの  
今宵の飯にもなるかとして  
双手にすくう雪の水  
よいよ よいよと こぼすなアよと  
白器に注ぐ月の水  
覗けば白色 茶碗底  
それじゃお月はどうしたと  
手のひら覗けば月もンよう  
三日月浮かべるダリヤもンよう  
三日月浮かべるダリヤもンよう

ئۈستەڭنىڭ تېگى قاتتىق ،

چايسا كەتتەن ئۆتتەيدۇ .

زالم توڭچىسى بە گلەر ،

بېشىمزدىن كەتتەيدۇ .

フオシヨル メンチイメン

原作：Hoshur Mämtin 『Ili xelq naxshilirining tarixiy bayani (イリイ地域の民

オホスチン ナフシメ

話・民謡の潮流)』Milletler neshiriyati (民族出版社) より 『Östeng Naxshisi』

Il passato

根岸大輔

塗油したギアが黒光って  
車輪が空転した途端に  
宙に舞って倒れたら  
堆積した汚れが  
過去を語り始めた

丑の刻に残る  
見慣れた歩道の裂け目  
が与えた教訓は  
アナクロニズムに沈んでいく

葡萄茶色の夕日を背に  
哀愁の川に浮かぶ経木が  
朽ち果てた時計の針  
に食らいつこうとする  
鮎を包んだ

## 醒めた砂

岡嶋宏和

ザラメみたいな風の吹く 淡い陽だまりに  
どうしてか触れなかった あなたの髪がなびく

ひとの前で 無防備に眠るのに  
独りになると何を想うの？

増えたゼロハンテープが 隠したポスターの滲み

つかみ損ねた空

そのどこか痛い青の中

あなたと破った約束

今でも欠片を探している

慣れちゃいないんだ僕たちは あの日からずっと

視界に渦巻く 後悔の歌に

忘れたくて走るんだ だれでも良い 声が欲しい

思い出で埋まらない 心の穴に

お姫様の手をつかむ 澄んだ英雄譚の夢

曖昧に二度寝を誘うから 寝覚めの寂しさが夜を鳴らす

あなたの唇が誘った クジラに会える水族館

今更に断る理由を探しているのでしょうか

手放したはずの日常

守ろうとして閉じこもった過去の中  
悪夢になったのは僕の方  
このすべてが砂上の砂遊び

愛しなかった人生は 思い込みの成れの果て  
エゴイステイツク  
自己中心的で結構ね 自虐のファンファーレ  
許さないよ今回は 不幸に溺れるその傲慢  
後付けの覚悟なんて 退屈なだけ

退屈なだけ

ああそうだ、覚えていたことだ

閉じた瞳と鼓膜と 震えるあなたの照準  
撃ってみなよ心臓を いつかの口づけみたい  
背負いきれない罪と罰 身勝手な妄想  
ちよつとくらい奪ったって 変わりはしないよな

慣れちゃいないんだ僕たちは あの日からずっと  
視界に渦巻く 後悔の歌に

そんな痛みごと僕を溶かしたのです 誰でもない あなたが欲しい  
思い出で埋まらない 心の穴に

日常のほとんどは伏線にならない

けどバス停の少女の水色の裾が 網膜の前をはなれ  
なくて 困る

わたしは林檎

特有の直線にべったりと凭れ

かかって 温度をさぐってばかり  
いる

お別れの日には少女の裾が何度も何度も翻って、翻るだけで、睫毛は上下して、  
そんなうちにお別れは通り過ぎて、完全な温度で執り行われて、済んだこと  
の美しさだけが残って、しまっ  
ている

先生の脚捌き

といつかの振り子運動が重なってわたし  
の回線を乱し てばかりいる  
みたい

眠いねと呟いた君の瞳は今ままで一番カフェインの色

仮初の町に真の君が眠ってる

本当の町に僕の嘘は眠りたくて

眠って

ほんとうと繰り返す君の唇だけがみにくい 呼吸ばかりしている

冷蔵庫を抱く君の腕に抱かれて夜が  
もがいて うづくまる頬がまるい

いつか風が少女の頬に涙をつくったなら、私はきつと風やら卵やらを思い出  
して、その桃色  
の頬を許せないと思う

夢みたいな夢みたい

佐伯実琴

——マツチ棒の軸——

体温を測る

熱が無い

明日、自然現象の何もかもが同時に起きたらいいのと思う  
嘘、起きないでね

僕の言葉に意味も何も生まないでね

——マツチ棒の先——

結局僕は冷蔵庫の扉を指先で開け閉めすることはできるのに、その中身を認識することがいつまでもできなくて、新しく清潔な色をした店から毎日常物を運び込むことをしている

物質が状態変化するなら僕の部屋はいつも秋で、嫌な汗をかく夏に取り残されたみたいないな気配と、急いで冬支度をしないとイケないみたいないな気配が同時にして、それで「そもそも今年は『よいお年』だったわけ？」と壁に描いた大きな顔が話しかけてくる

世界が終わりそうな激しい色の夕焼けに窓の外から気づいて「見て！ 世界が終わりそう！」と言っても「本当だね。でも終わらないよ、大丈夫」と社会的にはとっくに大人であるらしい僕に微笑まれる

呆れられたくないから、そこで馬鹿げた話をするのはやめて、じゃあ僕は可燃物じゃないんだって思う

人間は燃えて灰になって人間だったものとされるはずだから、僕は燃えずに、でも消えて、世界から記憶ごとなくなるんだって思う

握る手、掴まれる足、最後の子どもが付けた傷痕、停滞する脈拍、見せないことは罪、電子機器はしぶとく繰り返す、これが悪い夢なら時間を巻き戻す

魔法くらい使えたっていいだろうに、知らない知らない知らない知らない知らない……ってそればかりで

毛布と掛け布団の間に身体を潜り込ませて「一体それは前向きで明るいのか後ろ向きで暗くて落ち込んでいて人を泣かせて傷つけてそれでいて平気な顔で泣いて笑って怒って楽しく生きているのかどっちなわけ？」と壁に描いた大きな顔の唇が動く様子をじっと見ている

見ている

じっと

じっと見ている

「残念、認められないね」

残念、認められなかった

これはマツチ棒

いつ誰が使っても着火する優れもの

おめでとうございます

君の罪はいつだってそこにある、続いている、絶え間ない、ただ誰も君に近づきたくなかったただだよ

声がする

明滅がおそろしい

綿貫孝哉

ぴかっと光る発光体が道の奥に立っている。それは球体で、灯いたり消えたりする。切り替えの速度が早くなったり遅くなったり、誰かがどこかで操作しているのではないだろうか。道を歩く私を監視する誰かが。灯いたり消えたりするその間隙にまばたきを試してみる。光が照っているときには目を開いて、光が萎むときには瞼をたたむ。それを繰り返していると、発光体は常に光っているように見えて、世界は恒常性を保つ。私を惑わせる光の切り替えに対抗するようにして、目をぱちぱちさせている。見えていない間隙がおそろしい。向こうで信号機が点滅している。私は青色の光が消えるタイミングで目を閉じ、光が灯くタイミングで目を開けるから、ずっと青。そして急に赤になったりする。見られている。光が点滅すると、私がのろまだとか、何かが語りかけてくるような信号を送られている気がする。私は目をぱちぱちとして信号を拒否するのだ。断線。裁断される光。あの明滅がおそろしいから目を閉じる度に、光が消えて、灯く、情報が分散し、伝線する。そして、世界が、見えなくなる、いつも送られてくる／こない（こわい）、情報はばらばらで、音もよく、聞こえない、電車が／走り去って／裁断されて／しまった四肢／がまとまりなく散らばっている。あちらやこちらに

## 白熱光

米満優希

中華街裏手のジャズバー、の店内は細長いカウンターと数席のテーブル、で私はジンジャーエール 辛口、だと居座りやすい、を注文した、レコード棚 並んでいるキーポトル、越しのマスターはバディ・リッチ、アルバムジャケットが壁に飾られた、に似ている、はサーブが済んだらスマートフォン、というのも日曜日は客が少ない

手元を照らすランプシェードの電球、のフィラメントは染色体めいた、はペールオレンジの光を発する、が遡ること二日分の日記、遡行しない日記はあるのだろうか、を書きたい、ためには今ひとつ照度が足りないが、Nが同棲に向けた共同口座、を開設した事や、ぷつ、MとAが太極拳を始めて、馬の背中を撫で、たことはないはずなのに、るような型の話、ぷつ、を思い出すのに時間がかかっていると、ぷつ ぷつ、ぷつりと切、れては冷えてしぼんだ電球、を「今度のは明るい」、マスターが新しいのと交換してくれる

ドアが開き十一月の夜風が吹き抜けた、ので早くドアを閉めてほしい、ら一人の外国人が私の隣に座り、ジントニックを注文した、薄手のニットだけでは寒い、まで日記に書いたの、で今日が終わってほしい、肘をついた外国人、は「ニュルンベルクから来た」と言う、目線を落としてストローに口をつける私、のは閉口の仕草、左利きの彼、ということだけ面白い、が伝票、カクテル 七五〇円 チャージ 三百円、の裏にフリーハンドの地図を描いて示す、について私のエチケットは空間性に話題を終始する、日記をしまいフォービートに耳を傾けている、ことにするともう話しかけられなくな、つた後に考れば私の生まれ街は、潮香をまもって、山間に家明かりが並ぶ小銀河、被曝の歴史とともに語られる

最後の入退店から、アルバムが二枚かかった、白熱電球のフィラメント、は体細胞分裂を開始、や膨張するガラス球、で照らされる店内は、暖をとる

には過剰でア、イラインが滲みだす、気化したアルコールがくゆんでいる、  
ので爆発には気をつけた方が良いのだ、がブレーカーを落として音楽を止め、  
られないことになっている

dependence

いざない

私を帰らせる彼に  
ちよつと待つて  
駅から少し離れた喫煙所  
くらい埃に真新しい一本  
慣れてるように見せる口に  
気遣われる私  
先に燃えつきる彼は  
躊躇いなく落としていく  
私の煙草はまだ終わらない  
ちよつと待つて  
いつものキスが  
初めて同じ味になる  
窓から吹き抜けるにおいが  
体中を回る  
会える保証もない帰りに一言  
一九六番  
灰皿に溜まる彼への愛が  
今日もまた増えていく  
廃れていくタバコのようなきみが  
まだ好きだった

## 口境目の洞窟

北久保七海

「人口」

え、いりぐち？ ううん、じんこう。 あ、人口。

ずいぶんぼんやりとした洞窟、道筋はまだ見えない。ていうか人口も入口も出口も全部口がつくだなんて、人間は口から始まるのか。あ、みつけ。うまれたては何でも口にして世界を知る

(リカちゃん人形のサンダルはとても苦かった)

出る、抜ける、終わる、通過する、たべる、つかさずる、はなす、つかさずる、はなされる。

鼻。(別のところにたどりつく。) 花。虫、蜜、を吸う、わたし、の目の前、を通過する、仲介する。

増加、花の人口。

(もし、造花に取って代わられたら減っちゃうのかな)

イマジナリーフレンド、てきな

わたしたちもいっしょ、なんて

年々大きくなる長方形の□の中に広がる「いま、どうしてる？」  
でだけで一日終わってる

新しいものへ 古いのから(視点みたいに)

新しいのから古いのへも、さかのぼる という

なんという不思議!

(みたいな話を真夜中に放つ。)

幻と現をカン違いしたら、イエローカードを渡します。  
自分の居る所はしっかり覚えておくこと。

ここから先は踏み入れない、という琴線が、

見えなくなるんです、ときどき

昔、布団を頭までかぶって寝ると熱を出すと言われていた  
顔だけがつめたい空気にさらされる

解体されている家  
の横を通るとき、

玄関と二階に向かう階段が剥き出しになっていて

見てはいけないものを見ているようで恥ずかしくなる

(お手洗いの前にある段差は意図的だって、ぜったい)

夕方の丸ノ内線に飲みかけのカプチーノ  
を持ち込むとき、

この空気はいつの空気なの、って

プラスチックの蓋と紙コップを聖域化しようとする

いつだってどんなときだって超えている、またいでいるものがある、

その緊張感をおぼえている

わたしたちもいっしょ、なのに

向こう側に 人 が入ると

透明人間みたいにな

あつ

と超えてしまうこともある

「いつでも相談してね」とか

投げやりなことを言ってしまう

(何を言ったらいいのかわからないこともあるのに)

ぞわりとした痛みは、のちのちに、じわじわ

境目には、

やさしい目をした何かがい

またいではいけない口を

何もいわないその目で

見守っている

深藍

河村 琉空

明滅する白色街灯

その光はひどく白く

青白いと形容される

見上げた月明りは仄かに黄色く

青白く

街灯が途切れる

暗闇

つまり星々はひどくか細い

歩く

街灯はひどく白く

青白く

視界の半分を飾るアスファルトが青白く映る

街灯の青の由来である

アスファルトは街灯に照らされている

濃い青い空にさらされている

青をもたらすのは星々である

か細く、青く

こんなにも染める

近づけば燃えて灰になる

数百光年先の星の

数百年前の輝きしか知らない

もう死んでいるかもしれない

今星は恒星であることをやめ

超新星爆発の最中にある

そうであるならば

星々は何も照らさない

アスファルトを青く染めるのは

月光である、街灯である

月を照らす太陽

街灯の電球

白

息を潜める

夜は青白く

その根拠はアスファルトと空である

宙の果てで考えること

木村怜雄

路傍の石がまた跳ね上がってき、

いつもの景色を蹴っ飛ばして

空へ空へ、何度も重なって昇っていくんだ

宙を泳ぐみたいに

まるで何かを探してるように。

そのたびに、周りにはいろんな色が集まって

まるで欲望が寄り集まって渦を巻いてるみたいでさ

明日なんてもう、遠い遠い水平線の向こう

夕暮れの光がちらっと見える頃には

全部が逸れて、歪んで、どこまでも自由になる

「そうか、これが悟りってやつかもな」

ふと、そんなことが頭をよぎる

会ったこともない誰かと巡り合って

確かめ合って、全部が解け合っていく

自分なんてものが、もうなくなっていく瞬間ってやつだ

そのうち、わたしも空の高いところにいるんだろうか

弧の頂上にじっと結ばれた、一本の細い糸みたいに

過去も未来もぜんぶ一瞬に凝縮されて、

その場から動かない、動けない時が止まる瞬間

ただ、「ああ、これが成就なんだな」って

静かな気持ちで、全部がそこにある気がする

宙の彼方に浮かぶ鎮石みたいに、  
心のど真ん中に構えて、  
全ての音が静かに収まっていく

そんな安らぎもつかの間

気づいたらわたし、暗闇に向かってまた降りていくんだ  
その途中でさ、何か触れるんだよ  
まるで宙の温もりが手のひらに伝わってくるみたいに  
遙か先の、見えない極みに向かって

そして路傍の石がいつもの景色を蹴り上げて、

不意に耳に届く声がある

命じる夢の外へ体を向けたわたしは

少しだけ微笑んでいたみたい

そのとき、何か言ったんだっけ？

言葉はどこからか現れて、

私の奥の、誰もいない静かな場所を

そっと通り過ぎていったのかもしれない

## カレンダーの向こうがわ

小堺昂

うる一年の二月二十九日の真夜中に、カレンダーの向こうがわへ行けるらしい  
い  
かっちゃんが言ってたんよ  
二月と三月のハザマに取り残されて、こっちがわに戻ってこれるのは四年後  
なんやって  
腕がするりんと、まるで溶けてしまったみたいに、数字の世界に消えていく  
ん  
だあれもかっちゃんの言うことなんて信じんよ  
かっちゃんはひとりで試してみるんやって  
みんなバカにしてたわ  
でもぼくはき、ひよっとすると、もしかしたら本当なんじゃないかって  
だから試してみたいんよ  
今日が二月二十九日だからさ  
だれにも内緒でね  
友だちにも、おとうにも、おかあにも、かっちゃんにも内緒でね  
言ったらぼくまでバカにされると思うから  
カレンダーはただの紙だってさ  
ぼくだってそんなのわかってら  
でももしかしたら、もしかすると、そうなのかもしれないじゃん  
ごはんも食べて、お風呂も入って  
おかあもおとうも眠ってからね  
真っ暗な部屋に、理科で配られた豆電球を一つ照らして  
二月のカレンダーに、近づいてみるんよ  
黒と赤の数字がびっしり書かれた、数字の羅列で、目がぐるぐる回って

部屋の時計が、十二時ぴったり揃うまで、ほんの三十秒が、一日以上に感じ  
てん

そしたらさ、三本の針が重なるまで、あとちよつとの時に、部屋のドアがガ  
チャリと開いたんよ

あっ、って言ったたら、もう時計の針はバラバラなってる

「まだ寝てなかったの」

って、おかあが言うから、

「もう寝るよ」

って答えちゃって

だから、ごめんねかつちゃん

四年後になっちゃうな

そっちがわに行けるのは

二月のカレンダーを捲ったら、豆電球をしゅぽんと消して、眠るかな

始まったばかりの三月に、全て任せて、ぐっすりと

こっちがわでね

## サウンドスケープ

エドアルド・オツキオネーロ

断片を通じてしか、この世は耳の後側で再構成せず。「いっぱい飛んでいる」と松崎が言い「ボラだね」と。歩行を渡ると、右手にはみなとみらいの未来派っぽい建物たち、左手には山里のごとくケープブルカーがあり。

満員電車で「スミマセン、オリマス」と、手摺を掴む無数の手に陰らされた女の方が、とうとう品川で降りる。時刻は暗黒で、共感覚に従い夕焼けさえ紙を燃やす音を立てる。

「お取り忘れにご注意ください、オトリワスレニゴチュウイクダサイ」スイカチャージ後の自動音声。「下りエスカレーターです、クダリエスカレーターデス」。ふたつと靴がアスファルトに躓く。

音風景に浸っている状態で、「私、ワタシ」と口を酸っぱくすることは無用である。それは他の音帯域に自らの基本周波数で反応するだけの横隔膜にすぎない。目覚まし時計のチリンチリンと鳴る何かの音でとめどなく目を覚ますのが生きていることである。「あれって、鴉」と子供が叫び、それは「からす」の音響実現であり、且つその鳴き声。

人生は、よそへ向かうことであり、あらゆる路上も歪み、ノイズも階層制度なしに紛れ込む。モーラは聴覚的理解の基礎要素という。

では、死ぬとは何か。死ぬとは、耳の中で空の袋の気配がする、つまり蝸牛孔が止まること、永久に。

## ひとりの家

鈴木捷万

「おかえり」がない家に  
「ただいま」と言ってみる  
玄関の扉を閉める音が  
妙に大きく響く

帰る場所はここなのに  
帰りを待つ人はどこにもいない  
「いってらっしゃい」と見送る人もいないのに  
なぜか「いってきます」と  
小さな声でつぶやく朝  
その声は虚空に消え  
誰にも届かないまま

ひとりで過ごす時間は  
ゆっくりと、しかし確実に  
胸の奥の静寂を広げる  
遠くで遊んでいる子供の声  
時間を刻む時計の針の音  
どれも私の孤独を埋めてはくれない

かつては賑やかだった食卓  
笑い声と湯気の立ち上る景色  
それが普通だったはずなのに  
今では静けさがそのすべてを覆い尽くす

記憶の中にあなたがいる  
笑いながら、手を振るあなた  
その声も、表情も  
触れようとするたびに  
霧のように消えてしまう

忘れることが怖いのに  
覚えているのが痛い  
そんな矛盾を抱えたまま  
私はこの家で生きている

「ただいま」と言えば  
心の中のあなたが返事をするような気がする  
「いつてきます」と言えば  
あなたが微笑みながら送り出してくれる気がする

でも、それはすべて幻だ  
あなたが戻ってくることはない  
私の呼びかけに

答える声は失われたのだ  
いくら暖房をつけても  
この家の空気は冷たく  
あなたのぬくもりさえ  
少しずつ消えていく  
手のひらに残る感触も  
いつか風に流されるだろう

あなたのいない部屋で

一人つぶやく

「おかえり」も「ただいま」も

空虚に響くだけ

扉を開け、また閉じるたびに

心の中の空白が広がる

明日も同じように

この家に帰るのだろうか

けれど、あなたがいないその重さを

私はずっと抱えていく

誰にも届かない「ただいま」を

今日もまたつぶやきながら

## 花と食事

由布聡太郎

平熱三十六度八分の日を歩く

朝は、夜が蒸発した匂いがする

冷えた炭酸の一粒と似ている

朝食は鼻にねっとり絡みつくから食べない

家を出て生活をして、帰路につくと、喉の裏に機械油の溶けた匂いがこびりついて、

簡単な食事を作って、食べて、身体の汚れを落として、

冷えた毛布を着て、なるべく衣擦れの音が出ないように眠る

夢を見た、小さな惑星で水色とピンクが混ざりあった

沈む前の金星を見つけて

わたしは月を呑み込む

月に行こうと思ったのだけれど

「燃えてしまうよ」と魔法使いに言われたから

蠟燭を灯して、一息に消した

祝祭はあと何度訪れる、と

これだけでいいと思える日の幸福は

無効になる

向こう……

になる

の？

魔法の使い方は「知られないこと」、それだけ

アスファルトの街で育ったって土に還るように

影が濃くなると海を見たいと思うように

それは、何も求めず、知られないこと

本当は、花を買う人は花瓶を、食事をする人は食器を愛していた

花はどれだけ愛でもわたしにならずに壊れていつて

食事は白歯で壊すたびにわたしになっていつた

割れた電球で食卓を灯す

祝福のためのケーキがそつと佇んでいる

溶けた生クリームが手について、甘ったるいべたつきが取れなくなる

蠟燭を吹き消すと、ケーキは壊れて祝福はわたしになっていく

一つ種明かしをすると、そのケーキは今日になって焦って探してやっと見つけたこと

平熱三十六度八分の日、

彼女が魔法を使って、誰かが笑う

雪の下から覗く花に似た、小さな約束を抱いて、いて

(永方佑樹「祝奏の現在形」に寄せて)

## 場所と思い出

江崎愛理沙

場所と思い出が一致する

それはもはや

思い出が場所を犠牲にしている  
とすら言えてしまう

駅に降り立つ

駅を通り過ぎる

駅員の声を媒介に駅の名前を聞く

どの瞬間でも

思い出が心を侵食する

もう、きつと、この先もずっと

場所が思い出を想起して

時を止めてしまう

私のことだって、止めてしまう

この銀色の改札には

いつだって

別れ際の手を

名残惜しそうに見つめる私がいる

この瞬間の中ではもはや

時間も季節も嘘を付いている

とすら思えてしまう

私にとって恵比寿は

あの日の恵比寿から

あの人との恵比寿から

進むことはない

他の恵比寿はもう存在することはできない

限りなき消滅を繰り返し／光は届き続ける

岸俊太郎

夜波に浮かび、確かにそこにあつたものに思いをはせたとき、背伸びしがちな我々の生活についての論証は破られる

なにもかもがやぶれかぶれの世界のなかでも確かに自分を失わずに、ただ、私、私、私

それがずるいというのか、したたかだというのか

一方で、古来より伝承されし獣たちは私たちをいかすか、殺すか

魂の根幹をなすのはそれらの歴史か、私の足跡か、それとも、私たちの未来か、或いは

無の中に夢を見つける

もともと形がないから、だからこそ型を求めてきたんだろ

しらばっくれる生命の声は、私たちには何の意味もなさない、なぜなら、なぜなら、私たちはいま生きているから

私たちが生きているということ、それが

たとえ無だったとしても、たとえ夢だったとしても、たとえただの歴史になろうとも、変哲のない未来になろうとも

それでもともと、それでもあそこで見たたった一粒のために、（それはいつもそばにあるが）手を伸ばし続けろ、たとえ消えてもそれからが

とどけ、とどけここにあるすべてのあなたとわたしと、そして、いつかきつとは、いつも

煌めきたる命、爆ける花火のような、壮大で危険であるようなないような

そういった曖昧さをもって私たちは今もなお、あなたを想っています

きつと、いつかきつと、夜の海の中でも、朝の太陽の方角にも、麦の畑の黄金のあたたかさに抱かれ、あなたの手のぬくもり、私の身体のなか、魂に与えられたすべての物質、怒り、苦難、悲劇、いくつもの涙のあと、覚えてい

ないだけで、ずっと繰り返しているこの、すべての始まりである無と、愛すべき夢について、今いる次元を超えて、私とあなたでつくった、光の国を守り壊し繋げつづけようか

霜柱

古山円造

一億回の飛翔を経て

残機残りわずか

空気が汚いと言ったのは知らない人

どこからか収束して

死んだようになつた樹木の奥ゆかしさ

耳元を通過する羽虫が

直線の刃物をケツに引っ提げている

なんて

街に漂う煙の香りと

急いで帰る自転車たちが

公園通りのせめてもの賑わい

生姜が転がってきた、それも、瞼を超えている

酷いセリフも

小刻みに

逆陽炎の餌

もう一度明るくなったら

小さな足跡がはつきり

へっぴり腰の苔を好きな娘に会わせてやる

お家がわからない

中澤陽

僕のお家を知りませんか  
行方不明になりました  
とにかく歩き続けます

青梅線は空席を除けばほぼ満員  
窓際のポスター

この路線の本数が減るらしい  
つり革を掴めない少女がじれったいと言う  
私にはない語感

自分の語感はわかるらしい  
家がどこだかわからないのに

僕のお家を知りませんか  
行方不明になりました  
近所のホテルは覚えています  
東京都にある

管理人は不安気  
家賃は本当に支払われるだろうか  
9階から飛び降りた男  
7階に泊まっていた  
702号室のガラスが割れる

夫婦喧嘩の牽制弾  
男は自殺か他殺か  
とにかく地獄へ道連れ

地獄は硫黄の匂いと温泉地の湯煙以外はただの商店街

僕のお家を知りませんか

行方不明になりました

子犬を連れてた少年と顔なじみになりました

引っ張っている子犬はテリアの雑種

なんともかわいい

子犬は少年の自慢

わざとゆっくり歩く少年

はにかみ屋のくせに

子犬の名前はクンタ

ケンドリックの名盤からの引用だろう

私の家はアパートだから犬は飼えない

家の造りはわかるらしい

ひとの性はわかるらしい

ケンドリック・ラマーを知っているらしい

家がどこかわからないのに

ひと様の犬で憂さ晴らし

僕のお家を知りませんか

極東のアパートなんです

お座りを覚えたクンタ

しばらくして少年に会った

クンタを連れていない

少年は意地っ張りに走り去る

クンタは死んだのだろうか

山々を廻るカメラワーク

少年を待たずに歩き続けた

人を待つべきはこんなタイミングだろう

長く大きな世界の中で

徳重海

遂に来た、という感じだろうか。

分かっていた、始まった時から分かっていた、終わりが来ること。始まりは終わり。

粘土で作られた光年定規。

端がこの世の始まりで、端がこの世の終わり。

一年前に始まった始まりとその一年後に来そうな終わり。

定規をぐちゃっと両手でつぶしたら私の始まりと終わりなんて、

ほぼ同時点。

瞬きしたら終わりが来ると分かっているのに

私はなぜ始めることを選んだのだろう。

あなたは終わりが怖くないような人間だから、ずっと平気そうだった。

私は、ずっと苦しかった。

美味しいものはすぐに食べ終わってしまうあなた。

なるべく時間をかけて食べたいわたし。

そういうこと。

違った、私とあなたは違った。

苦しかった。

苦しかったけど、あなたは私の身体を補っていた。

こんな人いない、こんな、こんな私の身体中の隙間を満たしてくれる人は

あなたしかいない。

あなたも、そう思っている、

肌に触れる度、目を見る度に強くそう思えた。

今、

今はわからない。

私は、戸惑っている。

あー、粘土をぐちゃぐちゃにしたい

パズルのピースの本質に

鞘路直崇

パズルのピースには、それとぴったり嵌まり合う隣のピースがある。

それをちゃんと見つけて嵌めていけば、いつか一枚の絵が出来上がる。

そういうものでしょ？

でもあの人は違う。

ぴったりは合わないけど、頑張れば嵌まらなくはないピースがあって、そういうのを繋ぎ合わせて、一つの塊を作るんだ。

僕には、最後のピースを嵌める前と後で、どうして後の方が良いのか分からないし、どうしてそこでやめるのが良いのかも分からない。

僕はそれを綺麗だと思ったことはないし、面白いと思ったこともないけど、綺麗だとか、面白いだとか言っている人が確かにいる。

そう思う人がいるのなら、あの人が長い年月をかけて、それを作るのを上達させた甲斐があったんじゃないかなと思う。

僕ももしかしたら、長い年月をかけてそれを見続けたなら、それを良いと思う日が来るのかも知れない。

だけど僕は、あの人に嵌められているピースを見ると、窮屈で可哀想だと思ってしまう。

どんなピースにも、それとぴったり組み合うべくあるピースがあって、それをそっと嵌めてあげることが、唯一ピースの本質に合うことなんじゃないの？

僕はそのことを忘れたくなくて、あの人のやり方に慣れてしまわないように、予防線を張っている。

ところがあの人は、僕と真逆のことを言っているのに、結局おなじことを言っているんだ。

ピース自身の嵌まりたいように嵌めてあげるんだって。

まるでパズルのピースにも、本質に先立つ何かがあるかのような言い方で。

帰り道

梅村聖太

冷たい雨が窓を叩き

青く霞んだ街は遠くへ消える

濡れた舗道に足跡ひとつ

笛の音響き、風は舞う

静かな部屋に時計の針

仰いだ空に 月が光る

滲んだ灯りに影が揺れ

揺蕩う想いは胸の裡

夜の彼方で雨は歌い

蒼き夢は静かに消えて

## 夜

横田瑚子

寒さが残る春の夜は、  
手を繋いでいるような温もりと、  
空っぽの部屋みたいな冷たさが混じりあって、  
なんだかすこし気持ちが悪かった。  
泥水みたいに濁った夜の帳に、  
ドロっとした曖昧な空気が充満していた。  
高架下に佇む黒い湖を見つめていると、  
彼は僕に生ぬるい手を伸ばして、  
なんだか官能的に頬を撫でた。  
誘惑された桜の花びらたちは、  
彼の汚い水に沈んで、  
彼女たちの美しさは汚れになった。  
彼に滲んだ醜い月は、  
遠い記憶の中で失った誰かのようだった。  
夜に嫉妬した光が晒した彼は、  
夜道を寄り添う影のような顔をしていた。  
彼に殺された彼女たちの死体は、  
片目を潰して見ないふりをした。  
遠くで唸る車の音も、  
ずっと孤独な高架線も、  
全部が僕の味方をしてくれた。

誰も僕を証明できないぐらいに、  
彼らと一緒に夜に溶けて、  
温く汚く、混ざり合いたかった。

街灯が僕の肩を掴んだけれど、  
彼の手の感触とは違う、

錆びた鉄のような冷たい手だった。

彼の吐息が僕を溶かして、

僕と夜の境界は曖昧になった。

彼に抱かれて、僕は夜と一つになった。

## 花宿り

蓬澤杏奈

頬をつたい、首を柔く締め上げる雫が花びらになりましたなら  
哀しみも愛せるようになるでしょうか

あなたを濡らし、その胸に染み込む雫が花びらになりましたなら

この世の悲哀も美しいと言えるようになるでしょうか

誰のためとも知れずしたたる静謐な音の中で

わたしの枯れた傘をかたむける相手があなたであつたなら

どれほどわたしは報われたでしょう

わたしの身勝手な絶望があなたの上に降りそそぎ

あなたのはにかみがわたしの夜を覆つたら

こんな味のついた諦念も意味をもつでしょうか

音なく熱なくただ流れる雨の隙間に

わたしはあなたと花宿り